

『潮來婦志』の語彙と表現から

@kzh r (T w i t t e r 自由言語大學文學部)

○

『潮來婦志』は、江戸時代、江戸の戯作者式亭三馬が、遊興の地としても名の通ってゐた常陸國潮來に遊び、その遊廓を舞臺に描いた洒落本である。できがわるいと生前には刊行されなかつたものの、ことばにうるさいと知られた三馬のこと、本作にも潮來のことばに對する彼の觀察を隨所に見いだすことができる。

以前、岡田(二〇一二)として、『潮來婦志』の言語を調べてみたことがある。そのときは、紙幅のつがふもあり、その語彙をめぐる考證めいたことは割愛せざるを得なかつた。

このたびとて、漫然のそしりを免れらるゝとは思へないが、前稿に漏れたいくば

くかを論じて、そのおぎなひとしたい。

一

洒落本とは、江戸時代の文藝の一樣態で、一典型としては、遊廓に遊んだ男の體驗を、その地の風習や、遊女との會話を活寫しもして、敘する形態を取る。したがって、そこに描かれることばは、遊廓を出でて通用するものであつたかは分らないところがある。洒落本は、江戸後期に江戸の地で生れたものであるが、しだいを追つて三都以外の地をも取材し、また三都以外の地において刊行されるものも現れるにいたつた。そのやうなものでは、方言色を出して、その地らしさを醸し出さうとすることも少なくなかつた。

『潮來婦志』も、あくまでそのやうな

流れを出るものではない。前稿に格助詞と白圈(半濁點様の記號)を例に述べたやうに、江戸者はさておき、戯作のなかのひとびとは、潮來方言を思はせはしながらも、あくまで江戸の讀者に分ることばをしゃべるのである。

方言色を出すといふとくちに言つても、いろいろ手段は考へられる。じっさいは、文字で傳へられることには當然限界もあり、また、作り手にとって、ほんたうに方言を活寫してしまつては、讀んでもらへないといふ危惧は當時においても現代と同様であつたのだらう、いかにも方言らしい語や表現を效果的に用ゐるのが關の山であつた。

二

『潮來婦志』においても、そのやうないかにもふつうでないことばが集中して現れる箇所がある。それが後編の潮來對岸の佐原の若者同士の對話部分である。彦と新といふふたりの會話は、やがて彦がじぶんの床に戻つて新と遊女枝川の惚れた腫れたの會話へと移つてゆくが、さ

しあたって本題から問題になるのは、この通ぶったふたりの會話である。ここでは珍しい語が頻出し、その左側に江戸において對應する語が振ってあって、いかにも潮來の遊廓用語であることを期待させる箇所である。いくらか引用しよう(引用には、『洒落本大成』卷二十八、中央公論社、一九八七を用ゐる。引用箇所は一六二。右振り假名は省略)。

「客人新」としは二十四五さはらあたりの町人と見えたり今床が納て女郎の來ぬ内。つれの彦が床へあそびに來てゐる此客人は、ヤシ符帳(ぶてう)のさんしよをつかふくせあり

「新」ア、せつねへ。ゞきすを呑いた
ら大きにゞづれもになつた。爰もモウ
ちつとゞたつづぼをゞ能にしてへ「彦」
ゞどうろくが氣をつければゞまぶいけ
れどゞげんさいまかせだからゞきすだ
「新」トキニゞもくがゞかまらねへ「彦」
おれがを分やうたばこをいれてやる……

この後も遊び人の苦勞と愚癡が續くが、ここだけでも、「此客人はゞヤシ符帳のさんしよをつかふくせあり」と言はれた兩名の素姓と、通ぶったさまが窺へよう(さんしよは人形淨瑠璃の世界での符帳)。
この會話を讀んだ『日本國語大辭典』

の項目執筆者は、そのうちの幾語かを用例として採取したらしい。この本のみを出典とした語も同辭典に掲出されてゐる。「あつらん・うきすまわし・えむ・かま・げんさい・ごろ・てらしまごべえ・どうろく・はらり・まぶい・もく・もく・いれ・やしぶちよう・やわ・ろくじ」の十五語である。『潮來婦志』を用例の出典に持つ語は計二十三語であるので、かなりこの箇所に偏重してゐる。このうち、本書からのみ用例を引く語あるいは語義は、十例ある。そのほか初出とされる語・語義は四例で、新彦對談は、孤例・初出例の寶庫であるわけである。

これらの語は、どのやうな素姓を持つ語なのであらうか。『日本國語大辭典』には、「うきすまわし」のやうに「佐原地方のてきや仲間の隱語」と佐原のことばであるとするものもあり、また、「やわ」に「江戸時代の香具師(やし)仲間の隱語」とあり、「はらり」に「人形淨瑠璃社会の隱語」とあるがごとく、地域を限定しないものもあって、あつかひにゆれがある。

まづ、この語が佐原の方言のことばであるかは確かめがたい。記録にも乏しいし、潮來の遊廓は廢れてひさしく、そのまはりでのみ使はれてゐたことばも生き残ってはゐまいから、なんともはつきりしない(なほ、『佐原町誌』一九三一年にある方言語彙集には基本的に見えず、潮來出身の知人に教示を乞うたが、これらの語は現代の潮來方言で用ゐられる語でないとのことである)。

それに對し、これを江戸の隱語と見ると、すんなりと説明がゆく。他文獻に用例が確認できる語は、ほとんどがそのやうな近世・近代の隱語的用例であるし、用例が唯一例のものとしても、隱語辭書類に同義の確認できるものが多い。
けつきよく、これらを佐原の語とした解釋には慎重にならざるを得ない。江戸の的屋や淨瑠璃のことばを、潮來の通人も口まねするのだといふほうが、よほど推測としては當つてゐるやうだが、三馬が過剰に貶めてのこととも限らない。

三馬がまったく潮來のふつうのことばを用ゐないかといへば、當然そんなことはなく、が、い、ど、う、のやうな有名な茨城方言も現れる。變つたことばを紹介するごく

短いものではあるけれども、潮來の方言について述べたものがあつて、そのなかの語には、『潮來婦志』に用ゐられるところのある語もある（雲霞庵、一九〇三）。

たとへば、雲霞庵の記録には「ぼんげー」といふ語が見える。今夜の意である。

『潮來婦志』には舟のわたしにて「ぼんげへまで二百。押揚でござりまして又お歸りに舟サおのりなされば別に百五拾出ます」（一三〇）のやうに用ゐられ、同語であらう。現代でもひろい地域で用ゐられるこの語のこと、潮來以外で採取した可能性もあるが、「こわい事がござりますよ。上向の旦那さまにノシ。ちんぢやんぼんがござりますとサ（中略）ちやんじんぼん〇又はちんぢやんぼんトいふは葬禮の事也〇按ずるにデンヂヤンボンいづれも引導のなりものゝ音にていひならはしたるなるべし」（一四五）といふ「ちんぢやんぼん」は、おそらく當地でなければ

ば三馬は耳にすまじき表現で、雲霞庵には「ちんぢやあぼ（葬式）」とある。「ちん」がつくのは關東では茨城の特徴のやうで、他地域には「じゃんぼん」の多いやうである。

そのほかにも、茨城の方言に關する文献と對應する表現はあるが、いまは語を抄出して、詳細は省略に従ふ。主要な文献は本稿に觸れたものである。すなはち、なんじゃもんじゃ、げえだ、ちよっぽり、などなど。

四

潮來らしい表現についてもすこし探ってみよう。

本作には、（シ）ヤッセという勸奨表現が見られる。二例を數へるのみであるが、「喜八とのよウ。太鼓どぼちサ持て來やつせよウ」（女郎が小閒使に、一三九）および「サア此衆來やしましよ」（べつの女郎が客に、一四〇）である。最初の女郎は生れがあきらかでないが、後者の女郎は銚子生れという設定である。金田一（一九八一、二八）によれば、オ

キルの勸奨表現をオキヤッセ、ミルをミヤッセといふことが利根川から江戸川の流域周辺に行はれるといふ。潮來は江戸川、すなはち舊利根川流域ではなく、鬼怒川・小貝川流域にあり、この報告からは外れる。

茨城方言で行はれてゐる類似のいひかたには、金澤（一九八四）にある「（シ）ラッセ」が當らう。大橋（一九七四）一九七六、卷二、第六十三圖）には、潮來にほどこかい茨城縣稻敷郡東村（現稻敷市）に「寄らっせ」といふ形態が報告されてゐる。刊本『常陸方言』（中山信名・色川三中・栗田寛『新編常陸國誌』卷二、一九〇一、積善館）には、

〔サレ〕^{オホスル}指令辭ニテ、何セラレヨ
 ナト云フヨニ似タル言ナリ、見^{ミツ}——、
 來^{キツ}——、遣^{ヤツ}——、寢^ネ——、起^{オキツ}——、上^{アカツ}——、
 賣^{ウツ}——、來^{コイ}——、爲^{シツ}——、默居^{タマツテツ}——、
 ——、ナド云フ、
 〔セウ〕仰スル辭ニテ、レヨト云ニ同
 ジ意ナリ、見^{ミラツ}——、遊^{アスバツ}——、起^{オキラツ}——、
 遣^{ヤラツ}——、寢^{ネラツ}——、休^{ヤスマ}——、步^{アイバツ}——、
 歸^{カハラツ}——、上^{アカラツ}——、著^{キラツ}——、止^{ヤメラツ}——、

御坐——、行——、左様有——、如此
有——、歸——、又來——、行見——、
爲試——、能御坐有——、ナドノ語ア
リ、
(一九一九ページ)

とあって、やはり(シ)ラッセである。
すくなくとも、本作における(シ)ヤッ
セは、現代の分布からは自然でない形と
言へよう。

五

マシネエといふ叮嚀表現もある。江戸方
言に對應するマシナイは、『日本語大
辭典』第二版には「丁寧な打ち消しを表
わす。ません。近世後期江戸語で用いら
れた」とするが、ふるい用例は輕井澤を
舞臺とした『道中粹語録』(大田南畝)
であったりし、擧げられた『浮世風呂』
にも一例を數へるのみである(坂梨、一
九九五、九〇・九一)。それに對し、本
作では、八例がマシネエで、女郎たちが
おもに用ゐる、對する江戸方言的マセン
(ヌ)は七例で六例が舟頭の發話に偏る。
現代においては、金田一(一九五五)に
よれば、群馬縣など關東西部の方言によ

く見られ、千葉縣でも行はれるといふ。
いづれにせよ、これらの表現が、方言文
學にさきに多く現れることは、江戸方言
には外から入ってきたといふことを示唆
するものと言つてよいのだらう。

六

けつきよくのところ、いまよりおほくの
傍證を得ないことには、三馬が潮來の經
験をまじめに紙面に反映させる氣がそも
そもあったのか、考へるよすがもなく
突き止めつくすあたはずなり。しかし、
たんに潮來のことばを寫すだけではなく、
江戸人にひろく關東らしく映つた表現が
本作に垣間見られることは疑ひないこと
であらう。そしてそれは旅情をかき立て
るものとして消費されよう。

文學としては、このやうなうそもほ
んたうとも著かぬところに臨場感も生れ
るものであらうか。語學屋としては、せ
めて的屋言葉は江戸も潮來も共通性が高
かつたのだらうかなどと推しはかるのみ。
文學ですらない戲作に寫實を求める莫迦
正直者はこれにて擱筆。

文獻

- 雲霞庵花山(一九〇三)「常陸國潮來町の方言」
『風俗畫報』二六二
大橋勝男(一九七四・一九七六)『關東地方
域方言事象分布地図』桜楓社
岡田一祐(二〇一三)『潮來婦志』の資料性」
『語文論叢』二七
金沢直人(一九八四)「茨城県の方言」『講座
方言学五』国書刊行会
金田一春彦(一九五五/一九八三)「關東人
の言葉」『日本語セミナー』四 方言の世
界』筑摩書房
金田一春彦(一九八一)「關東・甲信越地方
方言の特徴」『全国方言資料二』日本放
送出版協会
坂梨隆三(一九九五/二〇〇六)「打消の助
動詞「ない」の發達」『近世語法研究』
武蔵野書院